

## 著者紹介

### Eric A. Brewer

カリフォルニア大学バークレイ校コンピュータ・サイエンス学部教授、Inktomi社の共同創立者、チーフ・サイエンティスト。  
E-mail: brewer@eecs.berkeley.edu

### 有澤 誠 (正会員)

1944年生。1967年東京大学工学部卒業後、電子技術総合研究所、山梨大学工学部を経て、慶應義塾大学環境情報学部／同大学院政策・メディア研究科に勤務。専門はソフトウェア工学、交通運輸情報論、コンテンツ工学。

### 安藤 進

訳書「プログラミングの壺」(共立出版)、「Java」、「JavaScript」、「Webセキュリティ&コマース」、「TCP/IPネットワーク管理」(以上、オライリー社)、著書「インターネット英語の読み方&書き方&調べ方」、「Eメールハンドブック」(以上、共立出版)。

### 石川 憲洋 (正会員)

1980年日本電信電話公社(現NTT)入社。1999年からNTT移動通信網(株)(現NTTドコモ)マルチメディア研究所に所属。IMT-2000システムの開発、モバイルインターネットの研究、WAP Forum標準化等に従事。  
E-mail: ishikawa@mml.yrp.nttdocomo.co.jp

### 石原 篤

シスコシステムズにて主にBroadband Access系コンサルティングSEとして活動中。  
E-mail: aishihar@cisco.com  
http://www.cisco.com/JP/

### 市村 重博 (正会員)

NECネットワークング研究所主任。1994年東京大学工学系研究科機械工学専攻修士課程修了。同年NEC入社。以来、グループウェアとモバイルコンピューティングに関する研究に従事。E-mail: s-ichimura@bx.jp.nec.com

### 歌代 和正

1983年よりオペレーティングシステム、ネットワークプログラミング等のソフトウェア開発業務に携わった後、1994年から(株)インターネットイニシアティブで、インターネットセキュリティサービスの開発に従事。

### 大江 将史 (正会員)

1997年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程入学。1999年同大博士後期課程に進学。現在に至る。WIDEプロジェクトや、A3プロジェクト上で、IPv6、ネットワークセキュリティに関する研究、運用に従事。

### 太田 昌孝 (正会員)

1959年生。1987年東京工業大学総合情報処理センター助手、2000年同大情報理工学研究科講師。理学博士。コンピュータグラフィクス、UNIX、計算の高速化、文字コード、DNS、マルチキャスト、QoS保証、超高速ルーティングなどの研究に従事。

### 大野 浩之 (正会員)

独立行政法人通信総合研究所情報通信部門非常時通信グループリーダー。1994年東京工業大学大学院情報理工学研究科講師。1999年より現職。2000年より内閣官房情報セキュリティ対策推進室(併任)、2001年より東京工業大学学術国際情報センター客員助教授。大規模災害時等の非常時におけるコミュニケーションに興味を持つ。博士(理学)。情報処理学会等の会員。WIDEプロジェクトボードメンバ。ITU-T/SG17ラポータ他。  
E-mail: hohno@ohnolab.org  
http://www2.crl.go.jp/jt/a114/

### 小田 稔周

1980年大阪大学大学院修士課程修了(工・通信)、1985年コロンビア大学大学院修士課程修了(計算機科学)。旧KDD研究所にて、通信網計画・設計、VoIP等のネットワーク・システムやサービス等の研究開発およびITU-T標準化に従事。2000年より日本エリクソンに所属し、主に3GオールIP化や将来移動通信網のプロダクト・マネジメント、標準化を担当。同社先端モバイル技術部ネットワーク技術担当部長。工学博士。

### 門林 雄基 (正会員)

平成6年大阪大学大学院基礎工学研究科物理系専攻博士後期課程入学。平成8年同大大型計算機センター助手。平成11年同センター講師。平成12年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科助教。博士(工学)。

### 菊池 義浩

1986年東北大学工学部通信工学科卒業。1988年同大学院工学研究科電気及び通信工学専攻修士課程修了。同年(株)東芝入社。同社総合研究所(現研究開発センター)に配属。以来、画像の圧縮符号化方式(H.261、MPEG-2、MPEG-4等)の研究開発、標準化活動に従事。電子情報通信学会、映像情報メディア学会各会員。

### 倉島 顕尚 (正会員)

1993年東京大学大学院工学研究科電気工学専攻博士課程修了。同年NEC入社。以来、グループウェアとモバイルコンピューティングに関する研究に従事。モバイル・サービスに必要とされるインフラ技術の開発に興味を持つ。現在、NECラボラトリーズ・ネットワークング研究所主任。博士(工学)。第54回全国大会大会優秀賞および平成11年度論文賞受賞。IEEE-CS会員。E-mail: kura@cjp.nec.com

### 坂田 一拓 (正会員)

1972年生。1997年京都大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了。同年NEC入社。以来、グループウェア、モバイルコンピューティングに関する研究に従事。現在、NECラボラトリーズ・ネットワークング研究所に勤務。E-mail: sakata@bk.jp.nec.com

### 阪田 史郎 (正会員)

現在、NECインターネットシステム研究所所長。1974年早稲田大学理工学部電子通信学科修士課程修了。同年NEC入社。以来同社中央研究所にて、コンピュータネットワーク、インターネット、マルチメディア通信システム、グループウェア、モバイルコンピューティング等のコンピュータと通信の統合領域に関する研究開発に従事。工学博士。1997~98年度本会理事(出版電子化・国際担当)。1997~98年度奈良先端科学技術大学院大学客員教授。IEEE、電子情報通信学会各会員。著書「マルチメディアとネットワークによるグループウェアの実現技術」(SRC)。共著「マルチメディア時代のグループウェア」(オーム社)、「情報ネットワーク」(電子情報通信学会編、オーム社)、「マルチメディアシステム」(昭晃堂)、「モバイルコンピューティング」(アスキー出版)、「インターネットとQoS制御」(裳華房)、「情報家電とインターネット」(裳華房)、「情報通信ビッグバン」(東洋経済新報社)、「サイバーネットワーク」(NTT出版)、「爆発するインターネット」(情報処理学会編)、「日本の電子商取引とインターネット」(総務省郵政研究所編)他多数。

### 宍戸 周夫

1948年生。1971年上智大学法学部卒業。同年日刊工業新聞社入社。出版局編集長、編集局編集委員。1997年よりフリーランス・ジャーナリスト、テレメディア代表。著書「マイ

クロソフトの真実」、「データウェアハウス」、「エンタープライズ・コンピューティング」など。

### 鈴木 裕信

コンピュータセキュリティ関連の活動が多いフリーソフトウェア運動家。著書「実践Linuxセキュリティ」(インプレス)。bit別冊情報セキュリティ(共立出版)では編集に加わる。ソフトウェア技術者協会、ACM、IACR、USENIX各会員。http://h2np.net

### 妹尾 稔

名古屋商科大学経営情報学教授。情報システム。著書「情報化戦略あなたが主役」、「SE育成読本」。経営情報学会、品質管理学会、プロジェクト管理学会各会員。

### 高橋 修 (正会員)

(株)NTTドコモマルチメディア研究所勤務。モバイルインターネットに関するサービスとプロトコルの研究開発に従事。電子情報通信学会会員。  
E-mail: osamu@mml.yrp.nttdocomo.co.jp

### 高橋 大介

1970年生。1991年呉工業高等専門学校電気工学科卒業。1993年豊橋技術科学大学工学部情報工学課程卒業。1995年同大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了。1997年東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻博士課程中退。同年同大大型計算機センター助手。1999年同大情報基盤センター助手。2000年埼玉大学大学院理工学研究科情報数理科学専攻助手。2001年筑波大学電子・情報工学系講師。博士(理学)。並列数値計算アルゴリズムに関する研究に従事。日本応用数理学会、ACM、IEEE、SIAM各会員。

### 武田 圭史

ネットワーク侵入検知、情報保証、Information Warfareに関する研究を行う。防衛庁航空自衛隊一等空尉、博士(政策・メディア)。

### 茶園 篤

現在、NECインターネットシステム研究所に所属。1997年奈良先端科学技術大学院大学前期博士課程修了。同年NEC入社。入社以来、マルチモーダルインタフェース、モバイル情報配信の研究に従事。電子情報通信学会会員。  
E-mail: chaen@ak.jp.nec.com

### 戸村 哲 (正会員)

産業技術総合研究所情報処理研究部門副部門長。内閣官房情報セキュリティ対策推進室(非常勤)。工学博士。実証的ソフトウェア研究、多言語情報処理技術、実証的情報セキュリティ技術、危機管理技術などに興味を持つ。  
E-mail: s.tomura@aist.go.jp

### 夏野 剛

(株)NTTドコモiモード企画部長。早稲田大学卒業。ペンシルバニア大学経営大学院ウォートンスクール修士卒業(MBA)。東京ガス(株)に勤務後、インターネットベンチャー企業にて副社長を務め、97年から(株)NTTドコモ。(株)ディーラーコミュニケーションズ代表取締役、(株)ドコモAOL取締役を兼務。

### 西田 豊明 (正会員)

1977年京都大学工学部情報工学科卒業。2001年4月から東京大学大学院情報理工学系研究科教授。人工知能、知識メディア、エージェントの研究に従事。

二瓶 克己 (正会員)

NECインターネットシステム研究所主任。1993年上智大学大学院電気電子工学専攻博士前期課程修了。同年NEC入社。以来、事例ベース検索、モバイル情報配信の研究に従事。E-mail:n-katsumi@ab.jp.nec.com

萩谷 昌己 (正会員)

昭和57年東京大学大学院理学系研究科情報科学専攻修士課程修了。京都大学数理解析研究所を経て、現在、東京大学大学院情報理工学系研究科教授。基本的に、演繹的推論を計算上に実装することに興味を持っている。また、最近では、生命情報関連の研究（特に、分子計算）も行っている。

藤岡 雅宣

1978年大阪大学工・電子修了。KDDに入社し、研究所において、ISDN、IN等の研究を担当。1993年からは、KDD交換部にて、新規サービス用システムの開発、国際電話用INシステムの開発を担当。1998年日本エリクソン入社、IMT2000プロダクト・マネージメント部長、その後先端モバイル技術部長として、IMT2000および新技術分野のプロダクトと標準化を統括。工学博士。

堀 修 (正会員)

1984年名古屋工業大学工学部情報工学科卒業。1986年同大学院工学研究科情報工学専攻前期博士課程修了。同年(株)東芝総合研究所入社。地図/各種図面理解、文書画像理解

に従事。1994～95年米国メリーランド大学Center for Automation Research, Computer Vision Laboratory客員研究員。1995年電気学会小平記念賞受賞。MPEG-7国際標準化活動に参加し寄与。現在、映像処理・理解の研究に従事し、同社研究開発センターマルチメディアラボラトリーに勤務。電子情報通信学会、IEEE各会員。工学博士。

前川 徹 (正会員)

1955年生。名古屋工業大学情報工学科卒業。1978年通産省入省。機械情報産業局情報政策企画室長、JETRO New Yorkセンター産業用電子機器部長、情報処理振興事業協会セキュリティセンター所長を経て、1999年早稲田大学国際情報通信研究センター客員教授。

松尾 正浩 (正会員)

1986年成蹊大学大学院工学研究科修了。同年(株)三菱総合研究所入社。情報セキュリティ関連の業務に従事。著書「bit別冊情報セキュリティ」(共著)他。JPCERT/CC運営委員会委員。

三輪 信介

独立行政法人通信総合研究所情報通信部門非常時通信グループ研究員。1999年より北陸先端科学技術大学院大学情報科学センター助手。2001年より現職。博士(情報科学)。ネットワークセキュリティ、電子決済等を主に研究。E-mail:danna@crl.go.jp  
<http://www2.crl.go.jp/jt/a114/>

村瀬 一郎 (正会員)

(株)三菱総合研究所情報技術研究部主任研究員。情報セキュリティ全般、情報技術政策等に興味を持つ。電子情報通信学会、日本医用画像工学会各会員。E-mail:murase@mri.co.jp

山口 英 (正会員)

1990年大阪大学情報処理教育センター助手。2000年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科教授。工学博士。インターネットを基盤とした大規模分散処理環境構築、ネットワークセキュリティ等の研究に従事。WIDE Project運営委員、JPCERT/CC運営委員会委員長。

山崎 秀夫

1972年東京大学経済学部卒業。三井情報開発、欧州三井物産を経て、野村総合研究所勤務。現在同社上席研究員。専門は情報組織論、知識管理。

横井 俊夫 (正会員)

1965年東京大学工学部電子工学科卒業。1966年電気試験所(現在:産業技術総合研究所)。1982年(財)新世代コンピュータ技術開発機構。1987年日本電子化辞書研究所。1995年フィリピン国National Computer Center。1997年東京工科大学工学部情報工学科教授。1999年同メディア学部教授。工学博士。E-mail:yokoi@cc.teu.ac.jp

# 会員募集中!!

▶ITの最新情報、研究発表の場の提供を通じて、あなたのお役に立ちます。

詳しくはWebサイト <http://www.ipsj.or.jp/> をご覧ください

申込/照会先 社団法人 情報処理学会

〒108-0023 東京都港区芝浦3-16-20 芝浦前川ビル7F

Tel(03)5484-3535 Fax(03)5484-3534 E-mail:mem@ipsj.or.jp



今一番新しい  
研究分野は  
何かな?

IT時代を  
リードしたい!

そうだ、  
情報処理学会に  
入ろう!



榊原康文, 小林 聡, 横森 貴 (著)

## 計算論的学習

情報数理シリーズ (B-6)  
培風館, 221p., 3,000円 (税別)  
ISBN4-563-01496-6

計算機に人間のような学習能力を持たせることを目標に始められた機械学習の研究は、人工知能の重要な一分野としてすでに長い歴史を持つ。ところが、この書評を書くにあたり「機械学習理論」のキーワードでGoogle検索を試みたところ、わずか11件しかヒットしなかった。「機械学習」が1830件であったのに比べて、驚くべき少なさである。これは、従来の機械学習の研究が、「理論」と呼べるものではなかったことを意味するのだろうか。もしそうだとすると、いったい何が足りなかったのだろうか。

1980年代に、AngluinやValiantらによって、計算論の立場から学習の理論的な枠組み(学習モデル)の提案がいくつかなされ、形式言語や計算の複雑さの理論を背景に持つ多くの理論研究者がこれに飛びついた。そして、すぐに重要な結果が次々と発表され、計算論的学習理論として一気に花開いたのである。この急展開の鍵は、これらの学習モデルにおいて、学習の成功基準を数学的に明確にしたことと、学習過程が完了するまでに必要な計算量を考慮に入れたことである。その結果、ある問題が(効率よく)学習可能かどうか、初めて「理論的に」議論できるようになったのである。ここで重要なのは、計算機に何ができて何ができないのか、その限界を見極めつつ、学習過程の数理的な現象の本質に迫る態度である。これによって、機械学習の研究の方法論が、錬金術まがいのものから科学的なものへと脱皮できたといっちは言い過ぎだろうか。

しかしながら、主に計算論の研究者(言語のクラスの特徴づけとか計算量の下界などに関する定理を嬉々として証明する人々)の手によって、彼らの日頃用いている組合せ論の技法を駆使することによって展開されてきたこの理論は、その成果がしばしば学術的に過ぎて、ともすると机上の空論と見られがちであったかもしれない。

以来20年近く経過した今、ようやくこの分野で得られた手法が、データマイニングやバイオインフォマティクスなどの領域で応用され、著しい成果を上げ始めている。これは、扱うデータ量が膨大になったため、アルゴリズムの開発にあたり計算量を無視することができな

くなったこと、そして、学習の精度が理論的に保証されたアルゴリズムが、現実のデータに対しても求められるようになってきたことを意味する。今こそ計算論的学習理論の出番である!

こうした中、待望の本書「計算論的学習」が出た。この分野におけるテキストは、すでにいくつか優れたものが出版されているが、訳書以外では、本書が初めての日本語によるテキストである。本書は「情報数理シリーズ」の第B-6巻で、情報教育の講義用テキストとして書かれている。このシリーズには、「情報理論」や「信号解析とデジタル処理」などのまっとうな(?)教科書が名を連ねており、この分野もついに市民権を得たか感慨深いものがある。

著者らは、計算論的学習理論の黎明期からこの分野に携わり、我が国で指導的な役割を果たしてきた。特に、今年で12回を数えるAlgorithmic Learning Theory (ALT) 国際会議の運営にもかわり、その後の日本での研究の流れを加速させる礎を築いた。

本書は、そのALT国際会議でこれまで活発に論じられてきた3つの学習モデル、極限における学習モデル(2章)、確率的近似学習モデル(3章)、質問を用いた学習モデル(4章)を取り上げている。本来、これらの学習モデルにおける主要な結果を網羅的に取り上げようとすると、それぞれ1巻ずつ計3巻の分量を必要とするであろう。これに対し、本書では、特に基本的な結果を厳選して丁寧な解説を与え、それ以外の主要な結果は各章ごとにまとめられた「文献ノート」で補うというスタイルを取っている。初学者は、まず本書で大局的な研究の流れをつかんだ後、さらなるステップアップのために文献ノートを利用するという使い方をすると良いだろう。また、この理論の基本的な手法を味わうためにも、証明を丁寧にフォローしたい。

本書の特長は、他の理論計算機科学のテキストにありがちな[定義]→[定理]→[証明]という論文調の形式を避け、できるだけ図表や具体例を用いた説明をこころがけていることである。一般的かつ抽象的な概念の理解を補強するように具体例が巧妙に選択されており、著者らの工夫が読み取れる。形式言語の理論や離散数学の初歩の知識があれば、独学で本書を読みこなすことはそれほど困難ではないだろう。一方、あえて苦言を呈するとすれば、各学習モデルの妥当性に関する議論がもう少し欲しかった。初学者は、たいていここでつまづくのである。また、各学習モデル間で成り立つ関係について、文献ノートではなく本文中で少しでも触れていれば、より深い理解の助けになったであろう。

最近、著者らは研究の対象をデータマイニングや遺伝子解析に広げ、計算論的学習理論で開発された手法を応用することによって成果を上げている。5章は、これら

の応用例の紹介にあてられている。読者は、RNA配列の2次構造が確率的文脈自由文法でうまくモデル化でき、その構造の予測に形式言語の学習アルゴリズムが役に立つという事実を知って驚くであろう。このように、最近、計算論的学習理論の研究者がデータマイニングなどの領域に続々と進出しており、強力な手法を提供している。また逆に、こうした応用研究からの要請が基礎理論の動機づけになり、新しい学習モデルや学習の手法が提案されるという流れも起きている。基礎研究と応用研究の1つの理想的な形がここにできつつある。本書は、この1冊で基礎から最新の研究の潮流をも堪能することができる良書である。

(瀧本英二／東北大学)



馬場 肇 (著)

## Namazuシステムの構築と活用 —日本語全文検索徹底ガイド—

ソフトバンクパブリッシング, 2001年, 267p.  
2,800円 (税別), ISBN 4-7973-1641-1

本書は、2000年11月号の「情報処理」にも掲載されたオープンソースソフトウェアであり、最近、Vine Linux等にもバンドル搭載されるようになった全文検索システムNamazuの解説書である。本書の特徴は、導入方法を解説してあるだけでなく、基礎的な全文検索の要素技術や、検索エンジンの技術的な仕組み、検索にまつわりつく自然言語処理等も初心者にも理解しやすいということである。このため、Namazuを利用しようとする人だけでなく、これから情報検索を学ぼうとする人達にも格好の入門書である。情報検索理論や自然言語処理理論の類の書籍には難しい専門用語や数式が立ち並び、とかく最後まで読むのが難しいものである。しかし、CD-ROMも付属しており導入に必要な文書とソフトがあるので、本書に書いてある手順に従って導入をしていけば、全文検索システムというものが大筋身につくのではないかと思う。本書は、以下の構成になっている。

- 第1章 全文検索システムとは何か
- 第2章 全文検索システムの基礎知識
- 第3章 日本語全文検索システムNamazuとは
- 第4章 Namazuのインストール
- 第5章 Namazuの基本的な使い方
- 第6章 NamazuをWebサーバに組み込む

- 第7章 検索システム運用の実際
- 第8章 Namazuを個人ベースで活用する
- 第9章 Namazuの高度な使い方
- 第10章 全文検索システムの詳しい構造
- 第11章 その他の全文検索システムの紹介
- 添付CD-ROM 各種検索システム構築ツール

第1章では、全文検索システムとは何かをWeb検索を例にとり解説している。

第2章では、全文検索システムを利用するにあたって、実際問題となる、古典的検索手法の基礎で完全一致型の成熟した技術であるブーリアン検索を利用したサーチャーのための検索式の作成手法を図解で解説している。また、高度な手法として部分一致検索、正規表現検索、ユニークな近傍検索 (NEAR 検索)、重み指定検索等の例も含めて、いかにして検索要求に応じた結果を取得するかを解説している。

第3章では、Namazuのソフト自体の入手方法、導入手順、仕組み、関連情報の流れているメーリングリスト、また、Namazuの導入事例の紹介をしている。フリーウェアとはいえ、官公庁、一般企業、マスコミ・出版関係、大学・教育機関等、多々の導入事例がある。実際に導入を検討している人は、いかに普及しているかが分かり、自分で運用をしてみる際の参考になる。

第4章では、UNIX系のプラットフォーム、Windows系プラットフォームで導入する際に必要なインストール前に準備する必要があるツールと実際のインストール手順を事細かに掲載している。

第5章では、さまざまな用途のインデックスファイル (転置ファイル) を作成するmknmzコマンドの使用法、またその設定ファイルであるmknmzrcの利用方法等利用できるまでの作業が述べられている。

第6章では、NamazuをWebサーバに組み込むためのCGIの設定手順について述べられている。Webで利用できるフリーウェアのCGIを利用するには、手間取ることが一般的に多いであろうが、NamazuのCGIに固有のトラブルシューティングも記述されている。

第7章では、大量の文書が流通して蓄積された情報の宝庫であるメーリングリストのアーカイブをHTMLに変換して公開しNamazuを利用して検索する方法について述べられている。さらにcronを用いたインデックス作成の自動化方法などメンテナンス手法も書いてありメーリングリストの管理者の人にお勧めである。

第8章は、Namazuの個人ベースの利用方法に関する解説の章である。Mule/XEmacsからもNamazuは利用できるが、クライアントの設定、さらに、メールソフト、Webプロキシとの連携方法についても手順を示してある。これらによって、個人で所蔵した文書を検索

し、ローカル環境で使用することができるようになる。文書検索システムを何に利用するのかは、当然問題になる。近頃、自分でWebサイトを開設して日記などを公開している人も多いであろうが、日記システムとの連携の例の紹介があるのでぜひご覧いただきたい。

第9章は、Namazuの高度な使用方法の技術的紹介である。本システムには、インデックス作成、検索語ログの収集、文書のクラスタリング等の機能がある。いずれも、膨大なテキスト情報から必要な情報を検索するには大事な技術である。それぞれインストール後には、Unixコマンドのように使用できるので説明が分かりやすい。最近ブームになっているWeb検索で使用されているPageRank手法によるページの人気度を利用したランキング手法を測定するためのコマンドも用意されている。このprnmzコマンドは、自分で検索エンジンを開発している人がベンチマーキングに利用することもできる。

第10章では、Namazuシステムの構造だけでなく、

全文検索システムの構造とその要素技術、またシステムの評価方法等を初心者でも理解できるように解説がなされている。

第11章では、Namazu以外にも多々あるフリーの全文検索システムと商用の全文検索システムの導入サイトの紹介とそれぞれの特徴について紹介している。フリーソフトの方では、実装の方法などを比較したりしているサイトやシステム選択のコツ等も紹介している。

本書は、Namazuシステムと検索エンジンの主要な技術について余すことなく解説している。本システムは現在も進化しているが、メーリングリストで最新の情報を収集して、知識を深めることができる。さらに自らがWeb検索サイトを構築、運営したりメーリングリストで議論したりすれば、全文検索システムに関する開発や研究に充実した経験が得られるであろう。

(小金沢雄一 / (株) 東芝)



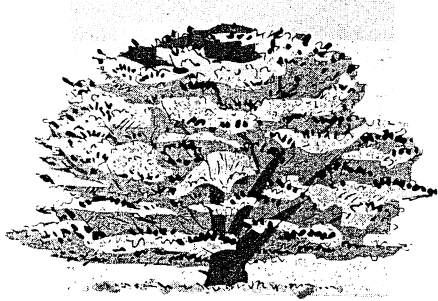
## おひいすらん



最近、携帯電話を新しいのに変えた。もちろんメール機能付き。周りの友人はすでに使っていたから「今ごろ？」と冷たい反応だった。最近の携帯電話はメール以外にもさまざまな便利な機能がついている。マニュアルを読んであれこれと用途を考えた。地域情報の配信サービス、カメラもついている。Web機能もあるので飲み会のとき終電確認ができるな、とか。しかし実際には使えなかったりするだ。この間の飲み会のときのこと。すっかり話しに夢中になっていた私は「あれが最終だから」と、まわりに促され、友人と2人で階段をかけあがった。しかし無常にも電車の扉は閉まって発車してしまった。友人とタク

シーで帰ろうか、と話していたところに心配したもう1人の友人から「〇〇からまだ電車があるんじゃないか」と電話。沈着冷静な友人が携帯を使って検索した結果、どうやらまだ電車があるらしいことが判明して無事に目的駅まで電車で帰ることができた。私は友人から電話がかかってきたときも携帯で検索などと思いつかなかった。私には携帯などの便利なツールよりも「頼りになる友人」の方が貴重な存在であるようだ。余談だが私はよく姉に「何度も電話したのに。」と怒られる。私はよく携帯を携帯するのも忘れる。

(五味奈津子 / 調査研究部門)



## 会議レポート

### オブジェクト指向2001 シンポジウム

#### 1.はじめに

情報処理学会ソフトウェア工学研究会では、過去6年間に渡ってオブジェクト指向シンポジウムを開催し、オブジェクト指向技術の有用性、開発現場での問題点や利点、最先端の技法など多岐に渡るさまざまな議論を行ってきた。

これらの経緯を踏まえて、2001年8月22日から3日間に渡って法政大学市ヶ谷キャンパスのポアソナード・タワーにおいてオブジェクト指向2001シンポジウムを開催した。

シンポジウムの目的は「日本の独創的な新しい技術の発信や運用経験などの情報交換の場を提供することによって、オブジェクト指向ソフトウェア開発に関して実践面や最先端の技術など、幅広く議論すること」とした。

本稿では準備段階を含めた運営とシンポジウムの内容について報告する。準備段階を含めた運営については実行委員長である大須賀とプログラム委員長である大西が執筆し、シンポジウムの内容についてはプログラム・実行委員である丸山が執筆した。

#### 2.準備段階

今回のシンポジウムの特徴を列挙する。

- (1) 基調講演を例年の2件から3件とした。
- (2) チュートリアルを全日に配置した。
- (3) 6件のデモ講演を行った。
- (4) 早期登録割引制度を初めて導入した。当日参加の数を減らし、受付業務の混乱を緩和するのが導入の目的であったが、参加者の81%が事前登録を行い、事前登録者の92%が割引を利用した。

- (5) 近代科学社から論文集<sup>2)</sup>を刊行し、基調講演論文、一般講演論文、デモセッション概要を掲載した。一般書店への流通の拡大などによるシンポジウムの成果の普及促進と投稿者のモチベーション向上が狙いであったが、書店での売上も好調と聞いている。シンポジウム資料は従来通りに学会にて印刷した。

いずれの企画も参加者には好評であったようであり、招待講演やチュートリアル、デモセッションは盛況であった。また早期登録割引制度は威力を発揮し、台風が近付いて開催が危ぶまれたにもかかわらず、雨の中、朝から200名近い参加をいただいた。参加者総数は248名に達した。

#### 3.プログラム

基調講演は研究、実践、製品開発研究の3つの立場からの講演をお願いした。研究の立場からは、要求工学の専門家であるジョージア工科大学のColin Potts氏を、実践の立場からは、パターンやプロセスでご活躍のLinda Rising氏をそれぞれ招待した。製品開発研究の立場からは、日本アイ・ビー・エムの内永ゆか子氏を招待した。いずれも第一線でご活躍の方々であり、大変興味深い講演であった。

パネルは「パターンは役に立ったのか?」、「日本が21世紀の組込み市場で勝ち抜くために」、「ソフトウェア工学の近未来チャレンジ」の3件を企画した。チュートリアルは昨年は初日に集めていたが、今年は3日間に分散させており、希望すれば全チュートリアルに参加できるようにプログラムを組んだ。内容もオブジェクト指向技術入門から実践・応用や最先端の話題に至っている。

恒例のモデリングワークショップは「再利用への新たな視点と実際」と題して、ビジネスモデリング、フレームワークやアーキテクチャ、パターンランゲージの3つの観点を切口として行った。さらに昨年度から始め、大変好評であったデモセッションを今年も企画し、6件の発表があった。

一般講演論文は研究論文と事例・経験論文の2つのタイプをフルペーパーとショートペーパーの2種類に分けて広く募集したところ、29編の投稿があり、各論文について3名のプログラム委員に査読を依頼した。査読報告に基づいて、プログラム委員会で厳正に審査し20編を採録とした。一般講演のセッション名は(1)分析支援、(2)プログラミング、(3)コンポーネント・メトリクス、(4)分散オブジェクト・モバイルエージェント、(5)テストと組込み・リアルタイムシステムであり、基礎的な研究から最新の研究まで幅広い内容となった。詳しいプログラムは文献1)を、内容は文献2)を参照していただきたい。

#### 4. 基調講演

4章では著者が参加した招待講演2件について報告する。チュートリアルと一般講演の報告については文献1)を参照していただきたい。

##### 4.1 “What Do Object Models Think about Life?”

by Colin Potts, Georgia Institute of Technology

オブジェクト指向分析を「現実の世界 (real world) に存在するものをそのまま表現する」と「現実の世界に存在するものを抽象化して表現する」ことを組み合わせた活動であると捉え、オブジェクトモデルの構築にはオントロジー (ontology) が深くかかわっていることを説明した。講演者は、このような従来の活動 (考え方) に対して、オブジェクトモデルの構築は状況依存である (contextual)、つまり「分析者のおかれた状況や分析者の認識によって変化する」という文脈依存型パラダイム (contextual paradigm) をソフトウェア工学に取り入れることを示唆した。さらに、この概念を進めて、「メタファー (metaphor) を現実世界を理解あるいは分析するための基礎」と捉え、このメタファーを用いて要求をモデリング (認識) する隠喩型パラダイム (metaphorical paradigm) を提案した。

講演では、彼の所有する携帯端末 (PDA: Personal Digital Assistant) やロールプレイングゲームを例にとり、それぞれの考え方によるモデリングの違いが示された。

##### 4.2 “IBMにおけるソフトウェア開発のプロセスとマネジメント” by 内永ゆか子, 日本IBM

IBMの組織構成や開発マネジメント体制などの実践報告であった。IBMでは、すべての開発プロセスにIPD (Integrated Product Development) と呼ばれる共通のプロセスが用意されており、これはソフトウェア製品に対するニーズの把握から製品の役割終了までの全工程をサポートしていることが述べられた。また、各工程の境界には、意思決定メカニズム (DCP: Decision CheckPoint) が設置されていることも述べられた。



図-1

講演では、ソフトウェア開発において、アーキテクトが重要な役割を担っていること、IBMは優秀なアーキテクトを育成することに力を注いでいることを強く主張していた。また、国際的な開発体制の中では、独自技術を持っているのと同時に国際協調と業界標準への貢献が重要であるという意見も述べていた。講演の様子を図-1に示す。

#### 5. おわりに

本稿ではオブジェクト指向2001シンポジウムの準備、運営、内容について紹介した。シンポジウム企画・実行するに当たって、多くの皆様にご協力いただいた。この場を借りて深く感謝したい。

#### 参考文献

- 1) 大須賀, 大西, 丸山: オブジェクト指向シンポジウム2001報告, 情報処理学会ソフトウェア工学研究会研究報告SE135-16, (2001)。
- 2) 大西, 大須賀編著: オブジェクト指向最前線2001, 情報処理学会oo2001シンポジウム論文集, 近代科学社, (2001)。

(大須賀昭彦/東芝研究開発センター,  
大西 淳/立命館大学理工学部情報学科,  
丸山勝久/立命館大学理工学部情報学科)





# 会員募集中

情報に関心をお持ちの方でしたら、どなたでもご入会いただけます。  
Webサイト (<http://www.ipsj.or.jp/>) からの入会が可能です。

## ★主な活動内容

- 機関誌の発行 会誌「情報処理」(月刊)  
「情報処理学会論文誌」(月刊)
- 全国大会 開催 CD-ROM論文集発行
- 調査・研究 領域(コンピュータサイエンス, 情報環境, フロンティア)  
所属の研究会, 研究グループによる発表会・シンポジウム等の開催  
調査委員会による特定課題の調査研究  
カリキュラム, アクレディテーション各委員会の開催
- 情報処理教育委員会 IFIP, SEARCCに加盟. ACM, IEEE, KISS, CSIと提携
- 国際交流 ISO/IEC JTC1. 情報技術の国際標準開発に参加
- 標準化

## ★会費

	入会金	会費
正会員	2,000円	9,600円
学生会員	免除	4,800円
賛助会員	1口	50,000円
購読員	1口	28,224円 (機関誌年間セット購読)

## ★会員特典

会誌「情報処理」の無料配布  
「情報処理学会論文誌」購読費会員特価  
研究会に登録(研究報告無料配布), 研究発表ができます  
全国大会, セミナー, シンポジウム等各種行事の参加費会員価格  
ACM会費が20%, IEEE会費が10%割引になります  
本学会編纂図書が会員価格で購入できます



社団法人 情報処理学会  
Information Processing Society of Japan

〒108-0023 東京都港区芝浦3-16-20 芝浦前川ビル7F  
TEL 03-5484-3535 FAX 03-5484-3534  
E-mail: mem@ipsj.or.jp



4年前、石田編集長が来てからそれまでと仕事のやり方が大きく変わる事となった。石田編集長がまず最初に私たちに指示したのは、記事ごとにレイアウトに変化をつけて、商業誌のような見栄えにせよということだった。それまでといえば、解説だろうが特集だろうがどれも同じ単調な2段組ばかりで、私たちの仕事というのは、レイアウト云々よりもどちらかといえば原稿の進捗管理に比重が置かれた、いわば編集事務と呼ぶのにふさわしいものだった。

ところが石田先生が編集長になってから業務内容が一変した。エディトリアルデザインなどそれまで勉強したこともなく、いろいろな雑誌を見比べてはよさそうなところを真似することから始まった。ちょうどその頃本格的にDTPで編集するようになったことも重なって、1つの記事のレイアウトを完成させるのに丸一日かけたこともざらにあった。常に頭の中には次の記事のレイアウトのことがあり、通勤電車の中でも人が読んでいる雑誌のレイアウトが気になり、中吊り広告を見ては参考になりそうなデザインはないかと物色するのが日課となった。

そんな中、石田編集長からは次々とメールがきた。「〇〇さんに特集のエディタを頼みました」。そう、石田編集長のメー

ルはいつも短い。解釈するに、〇〇さんに特集のとりまとめを頼んだので、掲載号を決めていつまでに原稿を集めればいいのかなど具体的な話は直接その人と進めてください、ということらしい。それまでは、目次案依頼-執筆依頼-閲読依頼-照会依頼と、きちんとした手続きと書式が決まっていた、私たちは編集委員の指示に黙って従っていただければいいだけであった。その甘い考えを根底から覆された。形式的な手続きよりも、とにかく最新の洗練された記事を載せることが最優先となった。指示を待っているだけでは企画が進まないの、こちらから積極的に動いていかざるを得なくなった。石田編集長の頼んだエディタは外部の人が多く、当然私たちのことをプロの編集者だと思って企画の進め方や内容までも私たちに聞いてくる。私たちはエディタのやり方によって臨機応変に対応を変え、自分で考え、アドバイスをしなければならなくなった。

石田編集長の「何かあったら私が全責任を持ちますから」ということばに隠されたスバルタ教育のおかげで、4年経ったいま、単なる事務局員ではなく、編集者としての自覚と責任感がたしかに芽生えてきたように思う。

(後路啓子/会誌部門)

本会名を使用した勧誘にご注意ください

最近本会の名称を無断で使用しての各種勧誘が横行しております。相手先の判明したものについては厳重抗議いたしておりますが、会員の皆様におかれましては、十分にご注意ください。本会の各種行事等のご案内などは、すべて会告でお知らせいたしております。

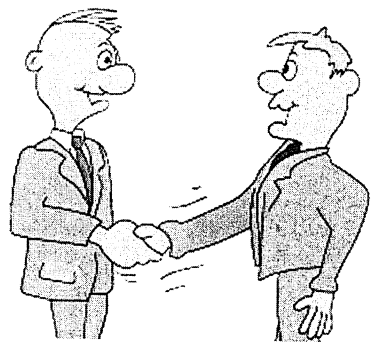
なお、事務局では会員データ、会員名簿の管理・取扱いには厳正を記しております。古い会員名簿を破棄をされませう際には、十分にご配慮をお願いいたします。

照 会 先 情報処理学会 会員担当

◆各種問合せ先 (社) 情報処理学会 (本部) ※支部所在地等詳細はリンクされている各支部ページでご参照ください。  
 〒108-0023 東京都港区芝浦3-16-20 芝浦前川ビル7F  
 Tel(03)5484-3535 Fax(03)5484-3534 <http://www.ipsj.or.jp/>

担当	E-mail	項目
総務	somu@ipsj.or.jp	理事会、支部、役員選挙、名誉会員
会員	mem@ipsj.or.jp	入会、会費、変更連絡、退会、在会証明、会員証
経理	keiri@ipsj.or.jp	出納
システム企画	sys@ipsj.or.jp	システム企画、電子化専門委員会
調査研究	sig@ipsj.or.jp	研究会登録、研究発表会、シンポジウム
事業	jigyo@ipsj.or.jp	全国大会、連続セミナー、プログラミング・シンポジウム
国際	intl@ipsj.or.jp	国際会議、IFIP委員会
図書	tosho@ipsj.or.jp	出版物購入
会誌	editj@ipsj.or.jp	会誌「情報処理」の掲載内容、広告掲載、転載許可
論文誌	editt@ipsj.or.jp	情報処理学会論文誌、出版
規格部 (情報規格調査会)	standards@itscj.ipsj.or.jp	標準化フォーラム 〒105-0011 東京都港区芝公園3-5-8 機械振興会館308-3 Tel(03)3431-2808 Fax(03)3431-6493 <a href="http://www.itscj.ipsj.or.jp/">http://www.itscj.ipsj.or.jp/</a>

## 会員の広場



今月の会員の広場では、9月号へのご意見・ご感想を紹介いたします。まず、特集「e-ビジネスを実現するソフトウェアサービス技術」に対しては、批判的な意見も含めて数多くの意見が寄せられました。

■青山さんの「ソフトウェアサービス技術へのいざない」は最近の動向をコンパクトにまとめてあり大変参考になった。今回の特集は良かった。(匿名希望)

■「ソフトウェアサービス技術へのいざない」は大変時流にあっており、構成・内容も良かったと思います。(南 正一)

■米国では、ITバブルの崩壊やテロの影響でe-ビジネスやインターネットの時代は終わりという雰囲気さえ感じられる。しかし、日本のe-ビジネスの現状を考えると、人あまり、在庫品たたく売りなのだから、米国等に追いつくチャンスじゃないかと思った。それとも、日本の現状はそれまでできないところまで来てしまっているのだろうか。(染谷広幸)

■この特集を高い関心を持って読みましたが、慣れない用語が多すぎてついていけませんでした。あまり用語に頼らない記述を望みます。(高橋英一)

■今回の特集記事に関しては、正直読む意欲が出なかった。ビジーな(あるいは逆に簡略化されすぎた)図面、実装例を示すスクリプトの洪水、そして詳細説明、門外漢に哲学書を読む忍耐力を要求しているという言い過ぎだろうか?概念からのトップダウンのみではなく、実例からのボトムアップを混在させたフレンドリーな解説記事を期待したい。(匿名希望)

■「UDDIとWSDL」は期待はずれでした。というより、Webサービスに関する記事はいつも期待はずれです。アーキテクチャや概念的な話ばかりで、本当に役立つものができる気がしません。いかにもサンプルというような例ばかり見せるのではなく、本当にこのように役立っていますという具体的な例を出さなければ、Webサービスの記事は誰も読まなくなるのではないのでしょうか?(匿名希望)

また、コラム「プログラミングをしないコンピュータ先進国」は、読者の皆様の関心も深かったようで、以下を始めとする数多くのご意見が寄せられました。

■「プログラミングをしないコンピュータ先進国」のご提唱は輝いております。大学・高等学校・中学校で指導にあたる先生自身を含め、プログラミングの大切さをしっかりと植え付けるべきだと思います。(山口 周)

■このコラムには同感し、また危機感をもって読ませていただきました。我が国では小中高生までの教育課程で、プログラミングについてモチベーションを与えるべき環境が余りにも乏しいと思います。宍戸さんが指摘する社会の仕組みの中に、プログラミング教育のあり方についてさらに突っ込んだ御示唆をいただければと思います。××検定などを目標とし

た教育ではそれ以上を望むべくもないと思います。

(匿名希望)

■このコラムを読んで、システムを作るのと効率の良いプログラムを書くのは、なかなか両立しがたいものであることをこの業界に入ってからしみじみ実感するようになった。システム構築の過程で発生するさまざまな要求をクリアするためにはどうしても冗長にならざるを得ず、良いプログラムではないことを自覚しつつも世に出さざるをえない苦悩を味わう開発者はかなり多いのではないだろうか。プログラマーだけでなくSE、SIのスキルを墮落させる劣悪なシステム構築環境こそがコンピュータ先進国に至る過程の最大の弊害であり、乗り越えなければならない重要な課題ではないだろうか。(匿名希望)

■とても興味深く読みました。「プログラミングとは何か」という問題は別にして、プログラミング教育に力をいれている国がたくさんある中、日本は力が入っていないように私も感じています。それは、コラムの中ででてきた高校生のように、少しの教育でプログラミングができる優秀な人が学生や教員に案外多いためなのでしょう。それとも、「プログラミングでは食っていけない」という意味で(この意見に私は賛成します)であり、そのためなのでしょう。今後、IT化が進むにつれ、質の高いプログラムやシステムの必要性が高くなると考えます。質の高いプログラムやシステムと、そうではないものを明確にして、質の高いプログラムやシステムを作ることが「カッコいい」ものになればいいなと思いました。(山本 誠)

■ソフト開発に身を置いていた一人として宍戸氏の指摘に同感です。ソフト開発は無から有、すなわち財を生産します。若い人はソフト開発に興味があり、創造力もあると思います。一方、待遇の悪さや多忙さ、またこれは私見ですが、将来つづしがきかないことを理由にソフト開発を避けている感じがします。日本のITの将来のための打開の1つとして、若い人が夢を持って飛び込めるような環境を整備することが急務と思います。(中島豊四郎)

■「プログラミングをしないコンピュータ先進国」では、日本の大学生はプログラミング技術コンテストにおいて開発途上国の技術レベルよりも劣っており、またプログラミング意欲が継続しないことが述べられており、唖然としました。しかも、そうやって来るところが日本の社会的仕組みに起因していると言うことで、技術立国としての日本の将来を考えるとき、一種の危機感を感じます。(匿名希望)

次に、コラム「韓国における急速なブロードバンドの普及とその料金(後編)」に寄せられた意見をご紹介します。

■韓国のブロードバンド事情には興味を持っています。日本では加入者向け回線が安くなっても、サーバ向け回線や施設はとても高額です。そのためにネット利用が萎縮しているふしがありますが、韓国ではどのように解決しているのでしょうか。米国でも盛んに利用されていた無料サービス(ゲームの試供品ダウンロードなど)が、回線や施設の負担に耐えられずサービスを中止する例が増えていきます。こうしたサーバ向け回線不足の問題が解消されなければ、利用が増えるほ



# Members' Voice

ど、サービス品質が落ちるといふ逆説的な状況になりかねません。(新井俊一)

■前編に続き、なにか混乱している我が国のブロードバンドと対比して、大変参考になった。(時岡廣行)

■韓国は、我が国の隣国であり、大変興味深く読みました。グローバル化が進む現代において、隣国の状況を把握することは、外国に直接研究・仕事に関係するしないにかかわらず、大切なことです。とりわけ、東アジア地域では、情報処理科学ならびに情報通信産業の領域において、欧米ほどネットワーク化が進んでいません。今後も、このような企画を期待します。とくに、最近情報通信産業が発展している、インドについての現状解説記事を希望します。(水野光朗)

■韓国のブロードバンドの普及については非常に興味深かった。日本も今後どうなっていくのが非常に気になるところである。(匿名希望)

その他の記事に関しては、以下のようなご意見・ご感想をいただきました。

■解説「ビジネス前線からみた Books on DemandとeBOOKの現状と将来」の中で述べられているeBOOKの今後に強い興味を持っている。電子ブックという概念はもうずいぶん前から取り上げられて、トライされてきたが、なかなか進展しない。企業においても、ISO14001取得のために文書の電子化を進めているが、こちらの方もなかなか紙は減らないようである。私も個人的にPDAで通勤時に本を読む。これはなかなか良いのではと試みたが、結局1冊もまともに読めたことがない。今回の提言の学術出版はどうなのだろうか。確かに世に出す機会が増えることは間違いなく、効果的なのかもしれない。しかし、eBOOKが本当に学術誌の伝達媒体として機能するのか検証が必要であろう。(濱 久人)

■解説「未来は我らのもの」の未来予測の具体的例に興味深く読みました。20世紀最大の科学者アインシュタイン博士やマイクロソフト社創始者ビル・ゲイツ氏ら、超々著名人といえどもピントはずれの予測があり、その予測内容はむしろ滑稽にさえ感じられました。未来予測の難しさがひしひしと伝わる記事です。(匿名希望)

■洋書を購入する際にはAmazon.comを使うことが多いので、コラム「Amazon.comの戦略転換」は大変興味深く読むことができました。情報処理学会の会員の方でも、Amazon.comで洋

書を購入されたことのある方は多いのではないのでしょうか。ただ、その経営戦略となると、分かっているようで分からないことが多く、大変興味深い論説といえましょう。ひろがえて、日本でも「オン・ライン・ショッピング」が盛んになりつつあり、これからの日本の流通形態を考える上でも、Amazon.comの経営戦略は参考になるところが多いと思います。(水野光朗)

■インタラクティブ・エッセイ「それって産業スパイ!?」は山崎氏が指摘しているように、ほとんど自社の宣伝をしているだけのような気がするのですが、どのようにして題目と著者を決めているのでしょうか?(匿名希望)

■「SEの知恵袋：作りたがるSE」はプログラムの作り過ぎに対する警鐘、「現代・コンピュータ市場：プログラミングをしないコンピュータ先進国」はプログラミングしないことへの警鐘と絶妙です。日本のITの抱えるさまざまな問題を浮き彫りにしているとは、深読みに過ぎるかもしれませんが。(西岡健自)

■書評「談話と対話」に興味を引かれました。自然言語に興味があるので、その方面の記事も載せていただければ嬉しく思います。(匿名希望)

最後に、今後の記事についてのご要望を紹介いたします。

■コンテンツ作成支援、特にVJ (Video Jockey) に関する記事が読んでみたいです。(武藤 誠)

■マルチメディア (特に音楽関連)、ユニバーサルデザインに興味があります。(匿名希望)

■メタル2線 (TEL) の通信速度の限界に関するコラムが読みたい。(匿名希望)

会誌や掲載記事に関するご意見・ご感想は学会ホームページでも受け付けております。今後もよりよい会誌を作るため、ぜひ皆様のお声をお寄せください。

【本欄担当 白井清昭、永井保夫/書評・ニュース分野】

ご意見をお寄せください!!!

皆様にとって会誌をより役立つものとするため、  
・記事に対する感想、意見  
・記事テーマの提案  
・会誌または学会に対する全般的な意見、提言  
・その他、情報処理技術についての全般的な意見、提言  
など、自由なご意見、ご感想をお待ちしております。

なお、「道しるべ」については

<URL: <http://www.ipsj.or.jp/katsudou/mag/michishirube.html>>

でこれからのテーマ案を募集しており、いただいたご意見をまとめております。

ご意見、ご感想を会誌に掲載させていただいた方には薄謝を進呈いたします。掲載に際しては、編集の都合上、ご意見に手を加えさせていただくことがあります。あらかじめご了承ください。

応募先 〒108-0023 東京都港区芝浦3-16-20 芝浦前川ビル7F

情報処理学会 会誌担当 E-mail: editj@ipsj.or.jp Fax(03)5484-3534

<http://www.ipsj.or.jp/enq/enq4212.html>



IPSJカレンダー

行事名	会場名	開催日	参加締切	論文/応募締切	掲載頁	担当
人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん2001)	大阪市立大	12月14日(金) ~15日(土)	11月30日(金)	9月14日(金)	42-11 会17p	研
第39回音声言語情報処理研究会	東工大	12月20日(木) ~21日(金)	当日のみ		42-11 会14p	研
第15回コンピュータセキュリティ研究会	情報処理学会	12月21日(金)	当日のみ		42-11 会15p	研
第43回音楽情報科学研究会	慶大	12月22日(土) ~23日(日)	当日のみ		42-11 会15p	研
第43回プログラミング・シンポジウム	箱根ホテル小涌園	平成14年 1月9日(水) ~11日(金)	11月22日(木)	8月24日(金)	42-11 会18p	事
第127回知能と複雑系研究会	ラフォーレ修善寺	1月9日(水) ~10日(木)	定員になり次第		42-12 会4p	研
情報システムと社会環境シンポジウム	学習院大	1月15日(火)	12月28日(金)	9月14日(金) 必着	42-12 会12p	研
2002年情報学シンポジウム	日本学会会講堂	1月17日(木) ~18日(金)	1月4日(金)	9月14日(金) 必着	42-12 会13p	研
ウィンターワークショップ・イン・伊豆	三菱電機五景館 (静岡)	1月17日(木) ~18日(金)		11月16日(金) 必着	42-9 会12p	研
第131回コンピュータビジョンと イメージメディア研究会	阪大付属図書館	1月17日(木) ~18日(金)	定員になり次第		42-12 会5p	研
連続セミナー2001 第5回 「E-マーケットプレイス」	工学院大	1月18日(金)	定員になり次第		42-12 会10p	事
高度交通システム (ITS) 2002 シンポジウム	学術総合センター	1月18日(金)	1月7日(月) 定員になり次第		42-12 会13p	研
四国支部 講演会「日本のコンピュータ の歴史」	高知工科大	1月18日(金)			42-12 会18p	四
第126回データベースシステム研究会	慶大三田	1月21日(月) ~22日(火)	定員になり次第		42-12 会5p	研
第147回自然言語処理研究会	産総研	1月21日(月) ~22日(火)	定員になり次第		42-12 会6p	研
2002年ハイパフォーマンスコンピューティ ングと計算科学シンポジウム (HPCS 2002)	つくば国際会議場	1月22日(火) ~23日(水)		9月14日(金)	42-12 会14p	研
第104回システムLSI設計技術研究会	パシフィコ横浜	1月23日(水) ~24日(木)	定員になり次第		42-12 会6p	研
第42回グループウェアとネットワーク サービス研究会	日本IBM	1月24日(木)	定員になり次第		42-12 会7p	研
第82回アルゴリズム研究会	東大	1月24日(木)	定員になり次第		42-12 会7p	研
第53回人文科学とコンピュータ研究会	宮崎産業経営大	1月26日(土)	定員になり次第		42-12 会7p	研
The 2002 Symposium on Application and the Internet (SAINT-2002)	奈良県新公会堂	1月28日(月) ~2月1日(金)	12月31日(月)	3月15日(木)	42-12 会16p	事
東海支部 講演会「自動車生産と 情報処理」	岐阜大	1月29日(火)			42-12 会18p	海
第37回プログラミング研究会	工学院大	1月29日(火) ~30日(水)	定員になり次第		42-12 会7p	研
International Workshop on Web Services Engineering 2002 (WebSE 2002)	奈良県ニュー パブリックホール	1月31日(木) ~2月1日(金)		9月25日(火)	42-8 会20p	事
分散システム/インターネット 運用技術シンポジウム2002	NTT武蔵野研究 開発センタ	1月31日(木) ~2月1日(金)	1月18日(金)	10月19日(金) 必着	42-12 会14p	研
デジタル・ドキュメントシンポジウム 2002	工学院大	2月1日(金)	1月18日(金)		42-12 会15p	研
連続セミナー2001 第6回 「家庭情報化サービス」	工学院大	2月25日(月)	定員になり次第		42-12 会10p	事
インタラクティブ2002	早稲田国際会議場	3月6日(水) ~7日(木)		11月9日(金)(一般) 12月26日(水)(インタラクティブ)	42-12 会18p	研
情報処理学会第64回全国大会	東京電機大	3月12日(火) ~14日(木)	2月15日(金) 必着	11月22日(木)	42-12 会10p	事
First International Workshop on Entertainment Computing (IWEC2002)	幕張	5月14日(火) ~17日(金)		12月15日(土)	42-11 会21p	事
画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2002)	名工大	7月30日(火) ~8月1日(木)		2月28日(木)	42-12 会17p	研
Intelligent Information Processing (IIP-2002)	カナダ モントリオール	8月25日(日) ~30日(金)		1月28日(月)	42-11 会22p	事
論文誌投稿締切		発行予定月		論文/応募締切	掲載頁	担当
論文誌特集号「ゲームプログラミング」		平成14年10月		平成14年 2月20日(水)	42-10 会22p	論
論文誌特集号「次世代移動通信ネットワークとその応用」		平成14年12月		2月28日(木)	42-11 会23p	論
論文誌特集号「グループウェアと ネットワークサービス」		平成14年11月		3月15日(金)	42-10 会22p	論
論文誌特集号「e-Japan時代のインターネット/ 分散システムの構築・運用技術」		平成14年11月		3月29日(金)	42-12 会17p	論

論文誌特集号「インタラクション技術の革新と実用化」	平成14年12月	4月12日（金）	42-11 会23p	論
その他		応募締切	掲載頁	担当
論文賞候補の論文推薦		平成14年 1月11日（金）	42-11 会13p	論
坂井記念特別賞候補者の推薦募集		1月18日（金） 必着	42-12 会4p	総
FIT（情報科学技術フォーラム）ロゴ募集		2月28日（木）	42-12 会19p	事

Webページ (<http://www.ipsj.or.jp/>) 更新情報 -What's Newより-

■2001年11月1日  
・第467回理事会報告

■2001年10月26日  
・「情報科学技術フォーラム（FIT）」の創設と今後の全国大会の開催  
について

#### 訂 正

会告42巻11号（2001年11月号）pp.18-19に掲載の「第43回プログラミング・シンポジウム参加者募集」の中で、ポスター発表の講演者に誤りがありました。お詫びして下記のとおり訂正します。

[ポスター発表]

・ Computation Scrapbooks of Emacs Lisp Runtime State  
（誤）萩谷昌己（東大）  
（正）Richard Potter（東大）

記1) カレンダーは本会主催・共催の行事を会告既掲載分より抜粋しています。

記2) 研究会の発表申込締切は開催日の90日前です。

記3) 担当欄の記号は次のとおりです。研: 調査研究, 事: 事業, 国: 国際, 論: 論文誌, 編: 会誌, 総: 総務, 経: 経理, 会: 会員, 規: 情報規格調査会, 北: 北海道支部, 東: 東北支部, 海: 東海支部, 陸: 北陸支部, 西: 関西支部, 中: 中国支部, 四: 四国支部, 九: 九州支部。  
各行事についての問合せ等は担当までお願いします。

記4) 掲載頁欄の記号は次のとおりです。本: 本誌, 会: 会告 (付録), 全大: 全国大会プログラム (付録)

ご意見をお寄せください!

[11月10日頃までにお出しください]

宛先 (社) 情報処理学会 モニタ係 (下記のいずれからも送付できます)
http://www.ipsj.or.jp/enq/enq4212.html Fax(03)5484-3534 E-mail:editj@ipsj.or.jp
(E-mailで送信される場合は、10-1-aのようにコードでお答えください)

[コード]

- 1. ご氏名
2. ご所属 Tel. ( )
3. E-mail:
4. 業種: (a) 企業(サービス業) (b) 企業(製造業) (c) 研究機関 (d) 教育機関(大学・高専など) (e) 学生 (f) その他 4-
5. 職種: (a) 研究職 (b) 開発・設計 (c) システムエンジニア (d) 営業 (e) 本社管理業務 (f) 会社経営・役員・管理職 (g) 教官/教員(大学・大学院) (h) 教職員(小・中・高校・高専など) (i) 学生 (j) その他 5-
6. 年齢: (a) 10代 (b) 20代 (c) 30代 (d) 40代 (e) 50代 (f) 60代以上 6-
7. 性別: (a) 男性 (b) 女性 7-
8. あなたはモニタですか?: (a) はい (b) いいえ 8-
9. あなたのご意見は「会員の広場」に掲載される場合があります。その場合: (a) 実名可(氏名のみ掲載) (b) 匿名希望 9-
10. 今月号(2001年12月号)の記事についてのあなたの評価をご記入ください。
(あなたの評価は年度のBest Author賞選定の際の資料となります。評価は以下の5段階評価をお願いします。)
[a...大変参考になった b...よい c...普通, どちらとも言えない d...悪い e...読んでいない]

[ページ]

【特集】ネットワークセキュリティ

- 1153 ネットワークセキュリティに係る動向 10-1-
1159 商用ネットワークにおけるネットワークセキュリティ確保の取り組み 10-2-
1164 内外CSIRTの現状 10-3-
1169 侵入検知システムに関する研究の現状 10-4-
1175 IPトラースバック技術 10-5-
1181 国外の政府レベルのネットワークセキュリティ確立への取り組み 10-6-
1186 我が国政府におけるネットワークセキュリティ確立への取り組み 10-7-

【特集】モバイルインターネット

- 1193 モバイルインターネットの展望 10-8-
1198 移動通信網のオールIP化 10-9-
1204 モバイルインターネットプロトコル 10-10-
1210 位置情報サービス 10-11-
1216 ストリームメディア通信サービス 10-12-
1221 モバイルコンテンツ流通と電子商取引 10-13-

【解説】

- 1226 計算機システムの性能評価とプログラムチューニング(後編) 10-14-
1231 翻訳:すべてがサーチ可能になるとき 10-15-

【連載】

- 1246 インタラクティブ・エッセイ:なぜ「メディア」なのか 10-16-

【コラム】

- 1234 SEの知恵袋:ビジネス劇を演出する次世代システムデザイナー 10-17-
1236 本当のインターネットをめざして:エニキャストの応用 10-18-
1238 研究会たより:研究会論文誌について 10-19-
1239 ブロードバンド時代と通信料金:CATVを取り巻くアメリカでのコンテンツ・ビジネス 10-20-
1242 米国インターネット事情:消費者向け電子商取引の現状と展望 10-21-
1244 現代・コンピュータ市場:外資系IT企業の生き残り作戦 10-22-

- 11. 特に興味を持ってお読みになった記事・著者への質問・取り上げて欲しいテーマなどをお書きください。
また「道しるべ」に取り上げてほしいテーマを募集しています。

我々のCWGで企画を提案した際、執筆メンバを見た主査のE先生から、「このメンバで本当に大丈夫?」と言われた。私は、まだ半年以上先のことであり、「大丈夫ですよ、何とかあります。」と答えた。E先生の心配は、執筆メンバの中でも、×さんと××さんであった。「絶対危ない。最終的には村瀬さんがここも書くんだな。」と言われた。

それから、半年、どうなったか。学会の綿谷さんに頼み込んで何度も伸ばしていただいた最終期限は、某日某日(とてつもなく12月に近い日である。明かせないのがつらい。)午前9時。この「午前9時」が威力を発揮した。日付だけでなく時刻まで設定すると、事態の緊急性を誰もが認識するのだ。

当日の午前0時の時点では、入稿は全7人のうち3人。私もまだ書けていない。メールと時計をチェックしながら、原稿を書く。午前2時何と×さんと××さんから入稿、午前4時ひそかに危険視していた△さんから入稿、午前7時私が原稿を書き終え、集まった原稿を学会に送って出勤、午前9時30分最後の×××さんから入稿。

あまりにも杜撰なスケジュール管理のためにこうなってしまった。その結果は、読者の皆様のご判断を仰ぐしかないが、もう少し何とかしたかったと思うのである。それにしても、綿谷様他関係者の皆様、ご迷惑をおかけしました。

(村瀬一郎/本特集エディタ)

学会より、モバイルインターネットの特集号を組みたいので全体的な企画をお願いしたいという依頼を受けたのが今年の3月、当時は世界最初のIMT-2000サービス開始を2カ月後に控え、まさにタイムリーな企画という印象を持ち、お引き受けすることにした。引き受けた理由をブレイクダウンすると以下の2つである。

1つは、私自身インターネットをはじめとするコンピュータネットワークのプロトコル技術に長年かかわってきたこともあり、第3世代のIMT-2000ではじめて無線の世界でインターネットと親和性の高いプロトコルスタックが適用されることに強い関心を持っていたこと、もう1つは、本学会モバイルコンピューティング(現モバイルコンピューティングとワイヤレス通信)研究会の委員として、1997年から3年間1回開催されるシンポジウムの企画や講演にかかわってきたことである。後者については、モバイルインターネットで展開される将来サービスを想定し、1997年は「モバイルマルチメディア」、98年は「モバイルECビジネス」、99年は「位置情報を活用したモバイルサービス」を特集テーマとしてシンポジウムを開催した。

国内で99年に開始されたブラウザフォンによるモバイルインターネットは、まさにこれらの3つのサービスを主軸に、世界に先駆けて

急成長を遂げてきた。本特集では、再度この3つのサービスをモバイルインターネットの重要サービスと位置づけ、それを支えるミドルウェア技術に相当するモバイルインターネットのプロトコル技術、IMT-2000に代表されるモバイル通信インフラ技術を階層的、体系的に捉えて今回のような構成にし、全体像をできるだけ分かりやすく理解できるよう考慮した。各分野で大いに活躍されている著名な方々に執筆をお願いしたところ、快く引き受けていただき感謝する次第である。

ここまででは順調に進んだ印象であるが、本号企画をお引き受けした1カ月後に、突然5月開始予定のIMT-2000サービスが10月に延期されることになった。本号発行とのタイミングにズレがでそうになり気を揉む事態となったが、幸い他号との調整でIMT-2000サービスの延期とは無関係に本特集の発行が数カ月遅れるとの連絡を受け、12月号という結果的にIMT-2000サービス開始にほぼ一致したタイミングでの発行となった。ここに学会をはじめ関係者の方々に深く感謝の意を表する。

(阪田史郎/本特集エディタ)

## 次号(1月号) 予定目次

編集の都合により変更になる場合がありますのでご了承ください。

### 「特集」ゲノム情報科学—観測技術の進展を支えるインフォマティクス—

バイオインフォマティクスと自然言語/ヒトゲノム解読とヒト遺伝子地図の精緻化/生物ゲノムの機能予測を旨指して/遺伝子発現量の観測と遺伝子ネットワークの解析—遺伝子の機能解析を旨指して—/比較ゲノム解析を中心とする進化ゲノム学の展望/ゲノム情報科学における情報科学的諸問題

### 「特集」ナノテクのトレンド

量子電子デバイスの最近のトピックス/超分子化学からのナノテクノロジーへのアプローチ—ケミストリーで作る分子デバイス・分子コンピューター

#### 情報処理最前線

高速化が進むネットワークプロセッサ..... Andrew Funk

#### 解説

機械は心を持てるか..... 滝 寛和 他

#### 連載 IETF/インタラクティブ・エッセイ

コラム SEの知恵袋/研究会たより/現代・コンピュータ市場/ブロードバンド時代と通信料金/米国インターネット事情/本当のインターネットをめざして



## 掲載広告カタログ・資料請求用紙

掲載広告の詳しい資料をご希望の方は、必要事項をご記入の上、E-mail:sei@ss-com.co.jp または Fax.03-3368-1519 へご請求ください。

「情報処理」 月号をみて

広告主名	製品名	希望項目*	その他要望事項

※希望項目：A 購入希望，B 担当者から連絡・訪問希望，C カタログ希望

フリガナ  
お名前

勤務先

所属部署

所在地

(〒 - )

TEL ( ) -

FAX ( ) -

ご専門の分野

広告のお問合せ・お申込みは・・・ 広告総代理店 (株) 精機通信社へ

発行 社団法人 情報処理学会  
 発行部数 30,000部  
 体裁 A4判  
 発行日 毎当月15日  
 申込締切 前月10日  
 原稿締切 前月20日  
 広告原稿 オフセット用ポジフィルム  
 原稿寸法 1頁 天地260mm×左右180mm  
           1/2頁 天地125mm×左右180mm  
 雑誌寸法 天地297mm×左右210mm

お問合せ・お申込みは

広告総代理店

**(株) 精機通信社** Tel.03-3367-0571

〒169-0073 東京都新宿区百人町2-16-13

Fax.03-3368-1519 E-mail: sei@ss-com.co.jp

### ■ 広告料金表

掲載場所	4色	2色	1色
表2	330,000	—	—
表3	275,000	—	—
表4	385,000	—	—
表2対向	300,000	—	—
表3対向	265,000	190,000	155,000
前付1頁	250,000	165,000	135,000
前付1/2頁	—	—	80,000
前付最終	—	—	148,000
目次前	—	—	148,000
差込 (A4判70.5kg未満 1枚)	275,000		
差込 (A4判70.5kg～86.5kg 1枚)	350,000		

\* 上記料金はポジフィルム納入による料金です。

\* 版下・製版等が必要な場合には別途実費申し受けます。

\* 断切広告は上記料金の10%増です。ただし、表4は不可。

\* 上記料金には消費税は含まれておりません。